

“惑星社会のフィールドワーク” の条件
——惑星社会の諸問題に応答する “うごきの比較学” (1) ——

新 原 道 信*

**Conditions for “Exploring Fieldwork in the Planetary Society”:
“Comparatology of Nascent Moments” Responding for/to
the Multiple Problems in the Planetary Society (1)**

NIIHARA Michinobu

How do we create the “wisdom of coexistence (*saggezza di convivenza*)” that are responding for/to the multiple problems on the planet Earth? How do we create the “wisdom” that allows us to experience the planet Earth as one *composite* ‘sea’ and society as ‘islands’ floating in it?

Is it possible? —— How we are perceiving/ sensing/ becoming aware and responding/ sympathizing/ resonating to the to the “screams of dissonance (*le grida dissoniche*) of the Earth, of other creatures, of other human beings, simultaneously and continuously, breaking the apparent “harmony” and “stability”?

Can the Exploring Field work in the Planetary Society take on or respond for/to this challenge? What are the conditions for that? What conditions are needed for Fieldwork to grasp the planetary society?

This article evolved from a research project called “Sociological Explorations on the “Comparatology of nascent moments” responding for/to the multiple problems in the planetary society” which is a part of the European Research Network’s activities at the Institute of Social Sciences, Chuo University. The project is based on the idea that exploring, against the tide of the disposition to dissociate/disengage oneself from what is happening, “Co-creating the Communities and Co-becoming communally for the Sustainable Ways of Being” is urgent and crucial for the 21st century planetary society, in which the multiple problems concerning exclusion and inclusion are increasingly frequent. Throughout the project, we are walking on the planet Earth and on perceiving and responding for/to the multiple problems of the planetary society.

The article reflects on the epistemology developed from dialogue with Alberto Melucci, Alberto Merler, Andrea Vargiu, Anna Fabbrini-Melucci. In that, the article sets

* 中央大学文学部教授

out a preliminary exploration for what might be called “Exploring Fieldwork in the Planetary Society” which is being involved with the field, being there by accident at the nascent moments in which critical events take place.

キーワード：惑星社会，惑星地球，内なる惑星，フィールドワーク，比較学，受難者／受難民，サルデーニャ，アジナーラ，メルッチ，メルレル

【目次】

- 1 はじめに——学術的な問いと本稿の位置
- 2 惑星社会のフィールドワークはいかなる条件を必要とするのか？
- 3 “複合・重合的に練り上げられたフィールドワーク”
- 4 ウイーンとアジナーラ島のフィールドワーク
- 5 おわりに——惑星地球に拘束された社会を生きるものが生身で行う“思行”の「現象学」としてのフィールドワーク

私たちの身に現在何が起きているのかを理解するには、様々な類の知がぶつかりあう十字路に身をおく必要がある。多くの顔を持つ近代的自我を理解するためには、私たちが既に身につけている視点をずらし、関係のつらなりをつかみ取ったり、体験をくりかえし重ねたりすることが可能になるような、ものの見方を選ばなければならない。人間の行為は、相互作用のプロセスから成り、様々な可能性と限界のフィールドのなかで絶え間なくつくられるものであることが、より一層明らかになってきた。このことがよりはっきりしていくにつれて、惑星としての地球に生きていること責任／応答力が、私たちすべての手に委ねられているということも明らかになってくる。したがって、私は、社会の関係性と諸個人の体験とを二つの軸とした、循環し、迂回していくような道筋を本書で探究しようと思っているのだ¹⁾。

1 はじめに——学術的な問いと本稿の位置

本稿は、中央大学社会科学研究所のヨーロッパ研究ネットワークを母体として着手された共同研究チームである「うごきの比較学」（2019～2021年度）の2019年度の研究成果の一端を示すものである²⁾。

1) Melucci, Alberto, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press, 1996 (=新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ—惑星社会における人間と意味』ハーベスト社, 2008年, 7頁)。以下, Melucci (1996=2008)。

2) ヨーロッパ研究ネットワークは、1996年4月より、第6・7代の社会科学研究所所長(1994～2000年)であった古城利明教授により、細分化された研究を架橋するグローバル・ナショナル・リージョ

本調査研究チームは、「可視的局面」の背後で諸個人の深部で不断に醸成されている「潜在的局面」に着目し、その“うごき (nascent moments)”と、社会そのものの変動 (transformation/transcendence/changing form/metamorphose) との関係性の動態を理解することをめざしている。とりわけ、個々人の深部における微細でリフレキシヴ（再帰的／内省的／照射的）な“うごき”に着目し、その“うごき”の方向性に応ずるかたちでの社会構想——問題のなかに予め答えが含まれているような「問題解決」ではなく既存の領域を横断して新たな問いを立てる“比較学 (Comparatology, comparatologia)”の創出を企図するものである³⁾。

“比較学 (Comparatology)”は、「ビッグデータ」を駆使した comparative study, comparative methodology (対象との相対的距離を確保した計測・観測)とは異なるアプローチであり、異なる境界線の引き方、新たな比較 (対話) 可能性をめざすものである。既知の分類による属性の比較にとどまらず、別ものとされたもの同士の“未発の状態 (nascent state)”⁴⁾に着目し、関係性の“うごき (nascent moments of relationship)”, すなわち関係性の在り方そのものが変化していく社会文化的プロセスを“とらえかえす (comprendere di nuovo, comprehend again)”。

本調査研究チームは、イタリアの社会学者 A. メルッチ (Alberto Melucci) の“惑星社会論 (vision of planetary society)”と A. メルレル (Alberto Merler) の“社会文化的な島嶼性論 (visione di insularità socio-culturale)”を現代社会認識の〈エピステモロジー〉としてきた。〈メソドロギー〉としては、メルレルとの間で“コミュニティを基盤とする参与的調査研究 (Community-Based Participatory Research (CBPR))”⁵⁾を、メルッチ夫妻との間で“療法的でリフレク

ナルの総体把握・全景把握、ローカルの実態把握に即したトランスナショナルで領域横断的な共同研究を企図として研究活動を行ってきた。その後、個別の研究プロジェクトによる研究チームとして研究活動を継承・発展させるかたちへと再編した。この流れのなかで、「3.11以降の惑星社会」(2013～2015年度)、「惑星社会と臨場・臨床の智」(2016～2018年度)として活動を続け、現在は「うごきの比較学」(2019～2021年度)により研究成果を蓄積してきている。

- 3) “うごきの比較学 (“Comparatology” of nascent moments)”：コミュニティ研究／地域学／比較学の“対話的／対位的なエラボレーション”については、下記の論稿を参照されたい：

新原道信『「うごきの場に居合わせる」再考—3.11以降の惑星社会の諸問題に応答するために(3)』『中央大学社会科学研究所年報』20号、2016年、15-32頁。新原道信「A. メルレルの“社会文化的な島々”から世界をみる試み—“境界領域の智”への社会学的探求(1)』『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学27号(通巻268号)2017年、73-96頁。新原道信「“うごきの比較学”にむけて—惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求(1)』『中央大学社会科学研究所年報』21号、2017年、67-93頁。新原道信「“うごきの比較学”から見た国境地域—惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求(2)』『中央大学社会科学研究所年報』22号、2018年、15-31頁。

- 4) 新原道信「“未発の状態／未発の社会運動”をとらえるために—3.11以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求(2)』『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学25号、通巻258号、2015年、43-68頁を参照されたい。

- 5) “コミュニティを基盤とする参与的調査研究 (Community-Based Participatory Research (CBPR))”は、メルレルの研究グループ FOIST と新原が実践してきた方法であり (Alberto Merler, *Altri scenari. Verso il distretto dell'economia sociale*, Milano: Franco Angeli, 2011), K. レヴィン, O. ボルダ, P. フ

シヴな調査研究 (Therapeutic and Reflexive Research (T&R))⁶⁾ を構想し、練り上げてきた。

「3.11 以降」は、“惑星社会の諸問題を引き受け／応答する (responding for/to the multiple problems in the planetary society)” ことを主眼として、共同研究の成果を下記のかたちでとりまとめてきた。

- ① 新原道信編著『“境界領域”のフィールドワーク——惑星社会の諸問題に応答するために』(中央大学出版部, 2014年)では, “多重／多層／多面”の境界区分の「変容」「超越」とともに, グローバル・イシューズが衝突・混交・混成・重合する「場所 (luogo, place)」として“境界領域 (cumfinis)”という概念を設定し, “惑星社会のフィールドワーク (Exploring Fieldwork in the Planetary Society)”の成果をとりまとめた。
- ② 新原道信編著『うごきの場に居合わせる——公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』(中央大学出版部, 2016年)では, 「3.11 以前よりすすめてきた“コミュニティを基盤とする参与的調査研究”と“療法的でリフレクシヴな調査研究”の組み合わせによるコミュニティでのフィールドワーク／デイリーワークの成果をとりまとめた。
- ③ 新原道信編著『“臨場・臨床の智”の工房——国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』(中央大学出版部, 2019年)では, メルレルとメルッチに共通するフィールドへの“臨場・臨床的な在り方 (ways of being involved in the crude reality)”に基づき, イタリアのランペドゥーザ, 宮古・石垣などの国境島嶼でのフィールドワークと, 立川・砂川やイタリア・サッサリのサンタ・マリア・ディ・ピサ (Santa Maria di Pisa) 地区などでの都市コミュニティの研究というフィールドワークの“対位法 (punctus contra punctum, contrapunto, counterpoint)”, “対話的／対位的なフィールドワーク (dialogic and contrapuntal

レイレなどの流れを汲む。W. F. ホワイトが『ストリート・コーナー・ソサエティ』の経験に基づき提唱した「参与的行為調査 (Participatory Action Research)」(William F. Whyte, *Street Corner Society: The Social Structure of An Italian Slum*, Fourth Edition, Chicago: The University of Chicago Press, 1993=奥田道大・有里典三訳『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣, 2000年), ニューヨーク・ハーレムの公営団地でエスノグラフィック・フィールドワーク (EFW) を実践してきた二人の社会学者T. ウィリアムズ (Terry Williams) とW. コーンブルム (William Kornblum) の方法と多くの共通点を持っている (Terry Williams and William Kornblum, *The uptown kids: struggle and hope in the projects*, New York: Grosset/Putnam Book, 1994=中村寛訳『アップタウン・キッズ—ニューヨーク・ハーレムの公営団地とストリート文化』大月書店, 2010年)。

- 6) メルッチは, 編著書『リフレクシヴ・ソシオロジーにむけて—質的調査と文化』(Alberto Melucci (a cura di), *Verso una sociologia riflessiva: Ricerca qualitativa e cultura*, Bologna: Il Mulino, 1998)において, 質的調査研究を中心とした多角的社会調査法の成果をとりまとめている。“療法的でリフレクシヴな調査研究”は, 同書以後のメルッチ最晩年の企図を再構成した調査方法である。メルッチの最晩年の企図については, 新原道信「A. メルッチの“未発のリフレクション”—痛むひとの“臨場・臨床の智”と“限界状況の想像／創造力”」矢澤修次郎編『再帰的=反省社会学の地平』東信堂, 2017年を参照されたい。

Fieldwork)”を通じて、地球規模の複合的諸問題に応答する“臨場・臨床の智”を探求した。

- ④ 新原道信・宮野勝・鳴子博子編著『地球社会の複合的諸問題への応答の試み』（中央大学出版部、2020年）では、第27回中央大学学術シンポジウム「地球社会の複合的諸問題への応答（Responses to the Multiple Problems in the Planetary Society）」（2018年12月8日、於・中央大学駿河台記念館）の成果をとりまとめた。このシンポジウムの問題意識は、「地球規模となった現代社会で生じつつある複合的問題の意味を理解し比較する学はいかにして可能か。異なるタイプの他者との相互理解、社会的痛苦の縮減を可能とする開発・文化・政治・経済・社会をどのように構想するのか」というものだった。

シンポジウムにおいては、「いま私たちがどこにいるのか、社会はどの地点にあるのか、地球社会の問題へのアプローチはいかにして可能か」「局所的なフィールドワークはグローバル社会の全景把握と構造認識にいかなる寄与をもたらすのか」についての問いかけがなされた。ここから本調査研究チームの根本的（da radice）かつ“対話的／対位的な問いかけ（dialogic and contrapuntal asking questions）”は以下のようなものとなった：

惑星としての地球の複合的諸問題に応答する“共存・共在の智”——惑星地球をひとつの複合的な海として、社会をそのなかに浮かぶ島々として体感するような“智”——を、いかにして紡ぎ出すのか。地球の、他の生き物の、他の人間の“不協の悲鳴（le grida disfoniche）”，同時多発的に継続的に、表面上の「調和」「安定」を揺りうごかす叫び声を“感知し（perceiving/sensing/becoming aware, percependo/intuendo/diventando consapevole）”，“感応する（responding/sympathizing/resonating, rispondendo/simpatizzando/risonando）”ことを、いかにして可能とするのか。惑星社会のフィールドワークはこの課題を引き受け／応答するものたり得るのか。そのためにはいかなる条件があるのか。

この流れに即して、本稿においては、〈惑星社会のフィールドワーク——「一本の葦（un roseau）」（パスカル「パンセ」断章番号347）であるような人間自らの足で惑星地球に立ち、寡黙で鈍足⁷⁾、跛行的⁸⁾に歩むフィールドワークによって、私たちがいまそこで生きる惑星社会の

7) 新原道信『境界領域への旅—岬からの社会学的探求』大月書店、2007年への本橋哲也氏の書評では、この〈エピステモロジー／メソドロジー〉を、「グローバリゼーションとかディアスポラとかポストコロニアリズムなどといった批評的用語を使って現象を分析し説明するような『学問』とはまったく異なる、いわばマングローブの根が絡まる地面を這って虫の眼で考えるような、寡黙で鈍足な」営みと評されている（本橋哲也「寡黙で鈍足、読者を不思議な味わいで魅了」『週刊金曜日』686号、2008年、42頁）。

8) 「跛行的」は、良知力『向う岸からの世界史——一つの四八年革命史論』ちくま学芸文庫、1993年、

諸問題を引き受け／応答するには、いかなる条件を必要とするのか) に応えることを試みたい。

2 惑星社会のフィールドワークはいかなる条件を必要とするのか？

2-1. 私たちは何に直面しているのか？

『地球社会の複合的諸問題への応答の試み』の序章においては、「なぜいま社会科学を“惑星／地球／社会”から始める必要があるのか」について考察した。前述の学術シンポジウム開催の“基点／起点 (anchor points, punti d'appoggio)”となったのは、「いま私たちがどこにいるのか、社会 (社会科学, 社会認識) はどの地点にあるのか、国家や地域の領域性を前提とした国際関係や国際比較という研究枠組みによって成立した社会科学が、今日の社会現象の総体把握をすることの困難に直面しているのではないか」という問題意識であった。メルッチは、この「アポリア」について以下のように述べている。

今日まで社会を解釈する方法として私たちが依拠してきた「近代性」に関する二つのパラダイム——ひとつは資本主義社会というパラダイムであり、いま一つは産業社会というパラダイムである——がもはや時代の変化についていけなくなった……これらを用いるだけでは、もはや私たちが目撃している社会を十分に理解することはできない。……私たちが語っている社会がどのようなものなのかは誰にもはっきりしない、ということを明言した方が、いいのではないか⁹⁾。

318-319 頁にて阿部謹也先生の「解説」において紹介された良知力先生の言葉から来ている：

飛躍した言い方になりますが、いま僕は、自分の学問が自分の中でもっともっと跛行的にならないければダメだ、もっと負うべきものは負わなければウソだ、という気がしています。……僕の子供の頃、『中央公論』か『改造』か、覚えていませんがとにかくむずかしい雑誌が一冊家に転がっていました。僕の家にはそんな雑誌を読む人間はいませんでしたから、きっとどこからか迷い込んできたのでしょう。オヤジがそれを取り上げて言ったものです。おまえも大きくなったらせめてこのくらいの本を読むようにならなければ、と。つまらないことを覚えているものですが、僕はいまそれを思い出すと、要するに『やりきれねえなあ』と感ずるのです。多分にひがみ根性をふくめて申し上げますが、学者でも上流中流の家庭にお育ちになった方々は、このやりきれなさはおわかりにならないと思います。そうした方々の学問—それは往々にして僕らの及びもつかぬ知的構成員をもっています—と僕らの学問とはおのずから異なってこなければならぬはずですが、だが、実際は僕はそのやりきれなさを『学問のなかで』まだ背負っていない。それを背負わぬかぎり、少なくとも僕にとって学問がきれいごと、まねごとに終わるのですが、……僕は学者になれず、また学者になってはならないのです。それは自分の肉親や仲間を踏み台にしながら背伸びして疑似文化をつかみえた者の負い目です (良知力「自戒」『ある軌跡—未来社30年の記録』未来社、1982年、122-123頁)。

9) Melucci, Alberto, *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*, Philadelphia: Temple University Press, 1989 (= 山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳『現在に生きる遊牧民—新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店、1997年、vii頁)。

上記のメルッチの言葉にあるように、私たちの社会認識の枠組みが持つ“限界性 (limit state, stato di limiti/confini, Grenzzustand)”¹⁰⁾の自覚から、“[何かを]始める (beginning to)”¹¹⁾とき、どこから、いかなるかたちで知の枠組みを“組み直す (ricomporre/rimontare, recompose/reassemble)”ことが必要となるのか？

分かるか分からないかも定かでないという「未解」「未決」の地点から現代社会の把握を始めるとして、手元にあるものは何かを考えることから始めることとした。そのため、『地球社会の複合的諸問題への応答の試み』の第1章では、「“惑星社会のフィールドワーク”は現代社会認識に寄与するのか」に答えることを試みた。さらに本稿では、もし寄与するところがあるとしたら、惑星社会の諸問題を引き受け／応答するフィールドワークにはいかなる条件を必要とするのかを問うこととなった。

10) “限界性 (limit state, stato di limiti/confini, Grenzzustand)”という造語は、「有限性 (Endlichkeit)」を“基点／起点 (anchor points, punti d'appoggio)”とする〈惑星地球に拘束された社会を生きるものが生身で行う“思行”の現象学 (fenomenologia del “pensare/agire” in carne ed ossa eseguita da coloro che vivono in una società confinata al pianeta Terra, Phenomenology of “thinking/acting” in flesh and blood performed by those who live in a society confined to planet Earth)〉の構築とかかわる。Endlichkeit (finitezza, finiteness)は、「無限性 (Unendlichkeit)」の対概念として「有限性」と訳されている。しかしながら、「成長の限界」ではなく、「成長」し続けるという欲望を「業 (カルマ)」とする人間の「成長という限界」という視点から考えるなら、無限性の追求という志向そのもののなかにある“限界性”の問題がある。身体 (内なる惑星) と惑星地球との“感知／感応”の“限界性”を通して、宇宙・人間・社会を考えるのが本稿の立場である。梅棹忠夫や安部公房に示唆を受けた以下のような考えが背景にある。プログラムを生み出すプログラムを創出した人間は、社会というシステムを“発明”し、生物としての自らの閉じた定常系のシステムを破壊する／革新するというアンビヴァレンス (ambivalence) を抱えてきた。生物として系統発生／個体発生のなかにある人間は「例外」や「変異」によって進化するが、拡大された身体としての国家社会は機械化 (官僚制化) していき、システム化された社会は、大量で高エントロピーの“造り出された廃棄物 (invented refuse)”で満たされる。「統治性の限界 (the Limits of Governmentality)」への“選択的盲目”によって、「統治不能なもの (the ‘ungovernable’)」の側にその原因を求め“異物 (corpi estranei)”の根絶・排除へと向かう。Cf. 梅棹忠夫、小長谷有紀編『梅棹忠夫の「人類の未来」暗黒のかなたの光明』勉強出版、2011年。安部公房『死に急ぐ鯨たち』新潮社、1986年。

11) E. サイド (Edward Said) は、その著書『始まりの現象』のなかで、『新たな学 (Principj di Scienza nuova d'intorno alla comune natura delle nazioni)』(初版1725年、二版1730年、三版1744年)の著者G. ヴィーコ (Giambattista Vico) と「対話」しつつ、「始まり (beginnings)」とは何か、それはいかなる「活動 (activity)」「瞬間 (moment)」「場所 (place)」「心構え (frame of mind)」を持つものかについて考察している (Said, Edward W., *Beginnings: intention and method*, New York: Basic Books, 1975 = 山形和美・小林昌夫訳『始まりの現象一意図と方法』法政大学出版局、1992年、xiv頁)。Cf. Vico, Giambattista, 1994 [1953 (1744 e 1730)], *Principj di Scienza nuova d'intorno alla comune natura delle nazioni: ristampa anastatica dell'edizione Napoli 1744*, a cura di Marco Veneziani (Lessico intellettuale europeo, 62), Firenze: Leo S. Olschki. [1953, *La scienza nuova seconda: giusta l'edizione del 1744, con le varianti dell'edizione del 1730, e di due redazioni intermedie inedite*, a cura di Fausto Nicolini, Bari: Laterza.] (= 上村忠男訳『新しい学1-3』法政大学出版局、2007-2008年)。

2-2. メルッチはどう考えたか

以下、本稿においては、冒頭のエピグラフ、メルッチの著『プレイング・セルフ』の「イントロダクション」との「対話」から「条件」を考察していく。英語版 (Playing self) のもととなった「私という遊び——グローバル社会における自分というものの変化 (Il gioco dell'io——Il cambiamento di sé in una società globale)」¹²⁾ というタイトルが付けられたイタリア語版も参照し、言葉の「質感 (texture)」も含めた含意を確認していく。

- ① 「私たちの身に現在何が起きているのかを理解するには、様々な類の知がぶつかりあう
十字路に身をおく必要がある。」

本稿冒頭のエピグラフで、メルッチが「十字路 (the crossroads of various kinds of knowledge, incrocio di diversi saperi)」という言葉で表したものを、筆者は、“境界領域 (cumfinis)”¹³⁾ という概念で“とらえかえし (comprendere di nuovo, comprehend again)”，調査研究をすすめた。“境界領域 (cumfinis)”は、グローバル・イシューズが衝突・混交・混成・重合する“場 (luogo, spazio, posto, sito, caso, circostanza, momento, condizione, situazione)”である。ここでの“場”は、グローバル・ナショナル・リージョナル・ローカル、マクロに対するミクロという空間把握、発展段階論的な線形の時間認識のなかにおかれたひとつの「点」ではなく、多系／多茎の可能性 (le vie possibili verso i vari sistemi, the possible routes to the various alternative systems) をもった“うごきの場 [特定の空間が特定の瞬間に未発の状態として在る] (field of nascent moments, campo di momenti nascenti)”であり、この社会の「広がり」と「深

12) Melucci, Alberto, *Il gioco dell'io—Il cambiamento di sé in una società globale*, Milano: Feltrinelli, 1991.

13) 新原道信「“境界領域”のフィールドワークから“惑星社会の諸問題”を考える」新原道信編著『“境界領域”のフィールドワーク—惑星社会の諸問題に回答するために』中央大学出版部、2014年、1-92頁の第7節「“境界領域”概念を紡ぎ出す」で、“境界領域 (cumfinis)”の概念整理を行い、いくつもの多重／多層／多面の「境界 (finis)」が“衝突・混交・混成・重合”しつつ「ともにある (cum)」場としての“境界領域 (cumfinis)”—(1)“テリトリーの境界領域 (frontier territories, liminal territories)”，(2)“心身／身心現象の境界領域 (liminality, betwixst and between)”，(3)“メタモルフォーゼの境界領域 (nascent moments)”という三つの位相から考え、知見を蓄積してきた。また、新原道信「イタリアの“国境地域／境界領域”から惑星社会を見る—ランペドゥーザとサンタ・マリア・ディ・ピサの“臨場・臨床の智”」新原道信編著『“臨場・臨床の智”の工房—国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』中央大学出版部、2019年、155-208頁のなかでも言及したが、調査研究をすすめるなかで、サルデーニャや沖縄といった地理的・客体的な問題設定が、実は個々人の身体に刻み込まれた一個々の内なる“深層／深淵”、間主観性、精神の境界の問題性を潜在していること、さらには、顕在化するか否かにかかわらず、“毛細管現象”として、“未発”であることを常態として“衝突・混交・混成・重合”し続ける社会的プロセスと深くかかわるところの“メタモルフォーゼの境界領域 (metamorfosi nascente)”の重要性に気付いた。

まり」の「萃点」（鶴見和子¹⁴⁾である。

“境界領域 (cumfinis)”は、可視的に固定されてとらえられた問題 (issues) の背後にある「潜在的な問題 (latent problem)」を“とらえかえす場 (momento per comprendere di nuovo, moment of comprehend again)”であり、そこでは、“対話的／対位的に問いかけ続ける (keep asking questions dialogically and contrapuntally)”¹⁵⁾ことが求められる。すなわち、「問いのレベルにおけるフィールドを常に再構築する (always requires a restructuring of the field at that level of interrogation, richiede sempre una ristrutturazione nel campo a livello dell'interrogazione)」¹⁶⁾ところの「萃点」である。

- ② 「多くの顔を持つ近代的自我 (modern self with its many faces, io molteplice) を理解するためには、私たちが既に身につけている視点をずらし、関係のつらなりをつかみ取ったり (grasp relational connections, cogliere relazioni), 体験をくりかえし束ねたりすることが可能になるような、ものの見方 (a way of seeing) を選ばなければならない。」

英語版では、「自我」を表すときのメルッチ固有の表現は、multiple selfとなっているが、「イントロダクション」では読者の理解にあわせて modern self with its many faces となっている。イタリア語版では、最初から、英語の multiple self に相当する io molteplice (筆者は「“多重／多層／多面”の私」と訳出した) という用語が使われている。「関係のつらなりをつかみ取る (grasp relational connections, cogliere relazioni)」では、英語は grasp, イタリア語は cogliere, いずれも、「意味を把握する」「機会をつかむ」という含意の言葉が選ばれている。すなわち、認識 (cognition, cognizione) の次元のみならず、身体的な感覚・感触をともなって、“関係性

14) 鶴見和子『南方熊楠・萃点の思想—未来のパラダイム転換に向けて』藤原書店, 2001年。

15) “問いかける (interrogando, asking questions to)”は、人々の間で (tra) 意見を求める (chiedere) 「問い (domanda)」への「答え (soluzione)」ではなく、新たな「問い」を求め、自分に対しても声をかける、自分の胸に聴く、身心の声を聴く (interrogare il proprio cuore) という含意がある。

16) Melucci (1996=2008), 196頁では、以下のような提起がなされている：

こんにち必要なのは、問題のなかに予め答えが含まれているような問題解決だけではなく、新たな問いを立てることに私たちの創造的な力を向けることであるということが、ますます明らかになってきている。もし創造性と問題解決とを同一視してしまうと、創造的活動は、必ずしも所与の問題に対する解答を導くものではなく、むしろそれは提示された問いのレベルにおけるフィールドを常に再構築することを要求するのだ、という事実を見落としてしまうだろう。芸術のように、問題を解決するわけではない創造的活動が存在するし、またある一定の枠内に制約された創造的とはいえない問題の解決だって存在する。私たちの社会は、創造的プロセスを促す個人の資源を発展させていくという試みに直面している。すなわちそれは、リスクを受け容れ、規定できないものを甘受し、既に知られ、分類され、決定されていたかに見えるものを、一時保留にすることを厭わないような能力である。それはまた私たちの心を開き、新たな領域を切り拓くために、自分自身の抑制や不安定さを乗り越えていく能力である。それゆえ創造力とは、それがいかに定義されようとも、驚嘆するという私たちの能力にかかっているのだ。

の動態を感知する (perceiving the roots and routes of relationship)”ことが提起されている。

メルッチによれば、「私はいまここに居る。ここが私のホーム（故郷だ）」という感覚が根底から突き崩される現在を私たちは生きている。突然、舞台は転換し、“見知らぬ明日 (unfathomed future, domani sconosciuto)”がやって来る。それ以降、“見知らぬ明日”は、常態となり、「私」は、「ホームであったはず」の場所との違和感、異物感、疎外感、隔絶や孤絶を“感知する (perceiving/sensing/becoming aware, percependo/intuendo/diventando consapevole)”。いながらにして“異郷／異教／異境”の地に在る／居ることを“感知”したとき、ひとはうごかざるを得なくなる。「約束」も「安全」も「保障」もない前人未踏の地 (no-man's-land) に立つ自分を意識し、「いてもたってもいられず」に、どんよりとした底なしの“深層 (obscurity, oscurit)”“深淵 (abyss, abisso)”へと“下降”していく。

底の見えない“淀み”の入江で、「いまここに居る」と思っていた「自分」が意識していなかった、ザラザラとした、“縛られた人間の固執観念 (obsession, /ossessione<obsessio)”, “拘束／絆 (servitute humana/human bondage)”にぶつかり、もがき、懊悩し、索漠たる気持ちとともに、流動性 (Flüssigkeit) のなかに身を投げ出し、その流れを「読む」ことを試み、もがく。なんとかこの“異郷／異教／異境”での「体験をくりかえし束ね、その意味を学びとる (accumulated experience, apprendere dall'esperienza)」しかない。

- ③ 「人間の行為は、相互作用のプロセスから成り、様々な可能性と限界のフィールドのなかで絶え間なくつくられる (continuously constructed with in a field of possibility and limits) ものであることが、より一層明らかになってきた。」

しかし、関係性は、「相互作用のプロセス (interactive process, processo interativo)」のなかに在り、この“関係性が切り結び直される瞬間 (nascent moments in reconstellation of relationship)”を内包し、「絶え間なくつくられる (continuously constructed, continuamente costruito)」。この絶え間ない生成の瞬間であり場であるのが、「様々な可能性と限界」を持った“[特定の空間が特定の瞬間に未発の状態として在る] うごきの場”である。

- ④ 「惑星としての地球に生きていることの責任／応答力 (the responsibility for our life on the planet Earth) が、私たちすべての手に委ねられているということも明らかになってくる。したがって、私は、社会の関係性と諸個人の体験とを二つの軸とした、循環し、迂回していくような道筋 (circular path, relazione circolare) を本書で探究しようと思っているのだ。」

メルッチは、私たちはいまや「完全に相互に結合していく社会、グローバル社会となった惑星で生活している」が、「しかし依然として、本来の生息地である惑星としての地球に依存して

いる (yet still dependent on the planet Earth)」という「二重の関係」によって規定されているとした¹⁷⁾。

私たちがいま、惑星社会となった惑星地球の上に立つ (we live on the planet Earth that has become a planetary society) ということは直接的現在である。しかし、この現在は、ヘーゲルが「私がベルリンに居るといふことは、私の直接的な現在であるが、これはここに来るまでの旅によって媒介されている (Daß ich in Berlin *bin*, diese meine *unmittelbar* Gegenwart, ist *vermittelt* durch die gemachte Reise hierher)」¹⁸⁾ と言うように、「わたしがここに居る (*ich bin*)」と「直接的 (*unmittelbar*)」に感じられていることが、実は「媒介されている (*vermittelt*)」。媒介 (*die Vermittlung*) とは出発することであり、自分と異なったものから自己へとやってきた限りで存在している。すなわち、“(軸足をずらし) 揺れうごきつつかたちを変えていく (*playing and changing form*)”，或るものから他のものへと“移行、移動、横断、航海、推移、変転、変化 (*passaggio*)”する運動である。この運動は、主語 (主体) が、それ自体、自己否定の運動を通じて自己の内へと折り曲げられることによって述語 (*Resultat*) が出てくるような事柄の必然性をもった運動であって、どこか別のところから述語をとってきて媒介もなしに付着させるような運動ではない (*radical, bounded, but playing* である)。このうごき、“旅程 (*itinerarium, itinerario, exploring*)”¹⁹⁾ の在り方によってズレが生じ、予想をこえるものが現れる。トートロジーではないところの“閉じない循環 (*circolarita schiudendo*)”である²⁰⁾。

17) イタリア語版では、「可能性の過剰 (*l'eccesso di possibilità*)」の側面のみ語られ、「依存」「物理的限界」「二重の関係」についての記述は英語版となってから加筆されている。(Melucci 1996=2008), 3頁。

18) Hegel, Georg Wilhelm Friedrich, Werke in 20 Bänden mit Registerband: Bd. 8: Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse 1830. Erster Teil. Die Wissenschaft der Logik, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1970, 157頁より訳出している。Cf. 真下信一・宮本十蔵訳『ヘーゲル全集1 小論理学』岩波書店, 1996年, 202頁。

19) “旅程 (*itinerarium, itinerario, exploring*)”という発想の“背景 (*roots and routes*)”に在るのは、哲学の恩師・真下信一先生から口伝えのかたちで教えていただいた下記の言葉である：

自然そのままの意識は、知の可能性をもっているだけで、実際に知を備えているわけではない。が、当初その意識は自分が知を備えていると思こんでいるから、真の知への道程は知の否定という意味合いを持ち、意識の可能性を実現する道行きが、かえって、自己喪失のように感じられる。この道行きで意識は自分が真理だと思っていたものを失うのだから、だから、この道程は疑い (*Zweifel*) の道と見なすことができるし、もっとはっきりいえば、絶望 (*Verzweiflung*) の道である。……意識の道程は、つぎつぎとあらわれる知が真理を外れたものであることを明晰に洞察していく旅であって、……現象学の道程では、教養形成の過程に生じる真ならざるものを、現実の一つ一つ克服していかねばならないのである。Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1986 [c1970], 72-73頁より訳出。長谷川宏訳のヘーゲル『精神現象学』作品社, 1998年, 55-56頁を参照している。Cf. 新原道信「旅」永井均他編『事典哲学の木』講談社, 2002年, 697-699頁。

20) 新原道信「“境界領域”のフィールドワークから“惑星社会の諸問題”を考える」新原道信編著

2-3. それでも手元にあるとしたらそれは何か？ どこから始めるのか？

この〈閉じない循環をもってうごいていく関係性を感知する〉ことが「条件」であるとしたら、その方法を考えたい。「うごき (nascent processes, processi nascenti)” への理解のため、“場 (luogo, spazio, posto, sito, caso, circostanza, momento, condizione, situazione)” に“居合わせる (being there by accident at the nascent moments in which critical events take place)” ことを我が身で行う、自分の足で、土の感触を確かめつつ、ゆっくり歩む学問の〈エピステモロジー／メソドロロジー／メソツズ／データ〉である。

ここで参考となるのは、経済学者 E. F. シューマッハー (Ernst Friedrich Schumacher) の後継者としてシューマッハー・カレッジを運営する S. クマール (Satish Kumar) の“思行 (思い, 志し, 想いを馳せ, 言葉にして, 考えると同時に身体がうごいてしまっているという投企)” である。

「自然は所有できない。わたしたちはその一部なのですから」「地球は未来からの借り物です。借りたときよりいい状態で返すものです」——クマールは、「ホーリズム (Holism)」が疑問視される時代に、最終目的地などないプロセスの全体を考え、個々の要素に還元されない「地球」を語り、「地球のため、ひとのため」に社会経済システムをデザインし直す。ふんだんにあるものを「希少」として、すべてを「計量」の対象とする社会システムに、なしくずし的に加担していく私たちの生活の在り方を問い直す。自分たちがその一部である不平等な社会システムを自覚し、システムへの怒りを「堆肥」とする。「いま、ここにいる (being here and now)」という感覚。「遊び」であるような「仕事」。「仕事は遊び、遊びは仕事」「すべての仕事はアートです」と、感謝しつつ歩く。大地にふれ、地球を感じ、そこから学ぶ。ゆっくりと歩くことでその学問が試される²¹⁾。石牟礼道子が水俣病の裁判で東京に来たとき「東京のアスファルトの上で自分のおしっこの跡に砂をかけようとしたが果たせず恥ずかしそうな顔をした猫がいた」と言ったように、その視線のなかにある新たなシステムを“創起する動き (movimenti emergenti)” は、むしろコンクリートの巨大都市を歩くときに発見される。「土」と「謙虚」は humilis という共通の語源から来ている。Being (在ること／居ること)。ある特定の場に居る“智恵”とし

『“境界領域”のフィールドワーク—惑星社会の諸問題に回答するために』中央大学出版部、2014年、1-92頁の第8節「ゆるく固定されたピボット・ピンのように揺れ動くプレイング・セルフ」で、ヘーゲルの「媒介」概念における主体のうごきを念頭におきつつ、メルッチの“(軸足をずらし)揺れうごきつつかたちを変えていく (playing and changing form)”自我像についての理解をとりまとめた。

21) ナマケモノ倶楽部編『サティシュ・クマールの今、ここにある未来 with 辻信一』ゆっくり堂、2010年の映像より。Cf. Kumar, Satish (edited with an Introduction), *The Schumacher lectures. Vol.2*, London: Blond & Briggs (= 耕人舎グループ訳「シュマッハーの学校—永続する文明の条件」ダイヤモンド社、1985年)。

での“臨場・臨床の智（cumscientia ex klinikós）”。“慎み深く、思慮深く、自らの限界を識りつつ（umiltà, decency とともに）”、“低きより（humility, humble, umiltà, humilis をもって、高みから裁くのでなく、地上から、廢墟から）”、よりゆっくりと、やわらかく、深く、耳をすましてきき、勇気をもって、たすけあう（lentius, suavius, profundius, audire, audere, adiuvare）智である。

“見かけ倒しの拙速社会（Società fittizia e rapida）”のなかで、単線的・効率的に、目的を求めて迅速に歩くのでなく、「巡礼者（pilgrim）」のように「いま、ここに在る／ここに居ることから始まる未来」を感じ取ろうとしつつ、大地への感謝とともに巡礼するという「理念」はたしかに美しい。多くの宗教や思想や文学の到達点として表現されているように、一瞬のなかに永遠はある（「世の中は何にたとへん水鳥のはしふる露にやどる月影」という道元の和歌のように）。これこそ、「朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり」『論語』『里仁第四』という「道」なのだろう。

しかしながら、「誠者天之道也、誠之者人之道也（誠は天の道なり、これを誠にするは人の道なり）」『中庸』である。すなわち、「正解」を聞くだけでは、決して自分のものとはならない。“自ら学ぶ／骨身にしみる／身体でわかる（autoistruirsi nel corpo）”という“身実（みずから身体をはって証立てる真実）”を獲得するためには、自分の足で大地を踏みしめ、ゆっくり歩む、特定の個人に固有の体験、“旅程”が必要となる。

にもかかわらず、私たちのなかに“埋め込まれ／植え込まれ／刻み込まれ／深く根をおろした（radicato）”線形構造のパラダイムは、単線的・効率的な「救い」を欲求する方向へと向かっていく。私たちは、「目的などない歩き方」を、より効率的で苦労やリスクの少ない方向で求めてしまう思考態度（mind-set）を抜きがたく持っている。「迅速さへの脅迫観念・誘惑」という“縛られた人間の固執観念（obsession/ossessione <obsessio）”から少しでも自在となるためにはどうしたらよいのだろうか。

「惑星としての地球に生きる（living on the planet Earth）」ものとして、“低きより（humility, humble, umiltà, humilis をもって、高みから裁くのでなく、地上から、廢墟から）”、“踏査・渉獵する（esplorando, exploring）”、“探究／探求”するにはどうしたらよいのだろうか。

ここから、以下のような“問いかけ”が導き出される：

モダニテイ
「近代性に関するパラダイム」を内面化し、全方位的で複合的な都市化、脱自然化、文化・化、（電）脳化の果てにある私たちが、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉ことはいかにして可能か？

2-4. “対話的／対位的なフィールドワーク (dialogic and contrapuntal Fieldwork)”

ここで求められるのは、惑星地球規模の「結合」が個々人の身心の内奥にまで侵入・浸潤しているという“状況／条件 (situazione/condizione)”のもとで、理論／実践、本質／現象、思考／行為、原因／結果、ミクロ／マクロといった区分に対する再帰的な領域横断である。

「水俣にはいま私たちが直面している地球全体の問題の核がある」と言った石牟礼道子²²⁾のように、あるいは、“異郷化 (spaesamento, feeling of being lost my home)”していく自らの身体を貫くかたちで、惑星地球にふれとらえようとした緒方正人のように²³⁾。そして神経難病となり、日々刻々と他者へとなりゆく自分の身体についての「旅の報告書」として著書『ボディ・サイレント』²⁴⁾を遺した R. マーフィーのように、あるいは、社会の病を研究する社会学者であったメルッチが自ら白血病となり、“社会的痛苦 (patientiae, doloris ex societas)”に病むものを外から観察・測定する社会の医者という外在的關係ではなく、社会的痛苦の体現者としての病者でもある社会の医者、社会的痛苦の体現者として病む医者、自らの病とともにある社会の医者として最期まで生きようとしたようにである²⁵⁾。

22) 「あの人に会いたい 石牟礼道子」2018年6月30日NHKにて放映、NHKアーカイブに保存。

23) 石牟礼道子『蘇生した魂をのせて』河出書房新社、2013年には、水俣病患者の緒方正人との対談が掲載されている。緒方正人の言葉を受けとめた辻信一との共作である緒方正人(語り)・辻信一(構成)『常世の舟を漕ぎて—水俣病私史』世織書房、1996年は、緒方正人・辻信一・中村寛の協業により、「増補熟成版」が準備され、2020年3月に刊行された。

24) Murphy, Robert F., *The Body Silent—The Different World of the Disabled*, New York: W. W. Norton, 1990 [1987] (= 辻信一訳『ボディ・サイレント—病いと障害の人類学』平凡社、2006年)。マーフィーと親交のあった辻信一によるすばらしい訳書となっている。すぐれたフィールドワーカーであったマーフィーは自らの身体が変成していく歩みと二重写しにする形で、運動神経系麻痺者たちがどのような態度と行動をもって「強く美しく若々しい」アメリカ文化のなかに順応し、また順応できないか、眼に焼き付け、耳をすました。これは、メルッチが病のなかで再確認した「自らの病とともにある社会の医者」の“かまえ (disposizione)”とも相通じるものだった。生前のメルッチとは、マーフィーについて何度も話し合い、2002年のミラノの追悼シンポジウムにおいても、このことを報告し(「痛むひとと聴くことの社会学」と「ボディ・サイレント」)、追悼本に収録している。さらに、2008年ミラノでの追悼シンポジウムにおいても、「惑星人の境界、移動、メタモルフォーゼ」という報告において言及している。Cf. Niihara, Michinobu, “Homines patientes e sociologia dell’ascolto,” in Luisa Leonini (a cura di), *Identità e movimenti sociali in una società planetaria. In ricordo di Alberto Melucci*, Milano: Guerini, 2003. Niihara, Michinobu, “Il corpo silenzioso: Vedere il mondo dall’interiorità del corpo,” in Luisa Leonini (a cura di), *Identità e movimenti sociali in una società planetaria. In ricordo di Alberto Melucci*, Milano: Guerini, 2003. Niihara, Michinobu, “Alberto Melucci: confini, passaggi, metamorfosi nel pianeta uomo,” nel convegno: *A partire da Alberto Melucci ... l’invenzione del presente*, Milano, il 9 ottobre 2008, Sezione Vita Quotidiana - Associazione Italiana di Sociologia, Dipartimento di Studi sociali e politici - Università degli Studi di Milano e Dipartimento di Sociologia e Ricerca Sociale - Università Bicocca di Milano, 2008.

25) 病とともに社会学をつくり続けた50代のメルッチの最晩年については、新原道信「生という不治の病を生きるひと・聴くことの社会学・未発の社会運動—A.メルッチの未発の社会理論」東北大学『社会学研究』第76号、2004年、99-133頁を参照されたい。新原道信『境界領域への旅—岬からの

ここでの知覚・認識・行為は、惑星と身体の相互作用——“身実（自らの corporeality によって身体をはって証立てる真実）”による“思行（思い、志し、想いを馳せ、言葉にして、考えると同時に身体がうごいてしまっているという投企）”——現に今起こりつつある焦眉の問題、小さな兆しに対して、臨機応変に、“臨場・臨床の場”で、“生身の現実”のフィールドをよくみて、かすかな声とまなざしに耳をすまし、意味付け、再解釈し、新たな枠組みを練り上げる、身心のすべてを動員したうごき（ワーク）ということになる。

個々人の身体や小集団、あるいは社会システムの「ちょっとした不具合・不調（piccoli mali, minor ailment）」として知覚されるような“心身／身心の現象（fenomeno dell'oscurità antropologica）”として生起する“社会的痛苦／痛み（doloris ex societas/patientiae, pain on society/patience）”，潜在的局面における微細な社会変動に着目し、寄り添い、耳をすますことにより、“惑星社会の病（malattie della società planetaria, diseases of planetary society）”も含めた“うごき（nascent processes, processi nascenti）”の全景把握をしていくという〈エピステモロジー／メソドロロジー／メソツズ／データ〉を追求することである。

重要となるのは、“生身の現実（cruda realtà, crude reality）”を理解するための、生身の“地（terra）”と“身体（corpo, corporeality）”の二重性からの“思行（facendo cumscientia ex klinikós, pensare/agire, thinking/acting）”である。メルッチによれば、今日、「環境に関する諸問題（the enviromental issues）」として意識されている惑星レベルの問題は、あくまで「外にある惑星（external planet）」に向けられたものである。これに対してメルッチは、私たちの社会が依存する「惑星地球」は、「マクロな地球」として私たちの「外にある（external）」だけでなく、「内なる惑星（inner planet）」としての「二重の関係」として存在し、私たちが規定しているとした。external に対して internal（内部の、体内の）でなく、inner, personal という言葉を配置し、“対位法（punctus contra punctum, contrappunto, counterpoint）”をとった²⁶⁾。

社会学的探求』大月書店、2007年、217-227頁では、「コルプス／コルポリアリティー社会的痛苦を聴くことの社会学」という節を設け、メルッチの「社会の医者」論とその“思行（facendo cumscientia ex klinikós, pensare/agire, thinking/acting）”についてまとめている。

26) メルッチは、(Melucci 1996=2008), 81頁で以下のように述べている：

根底からの変容のプロセスに巻き込まれている惑星には、もう一つの惑星がある。すなわち、私たちの体験や関係の基盤をなし、生物学的、情動的、認知的構造からなるところの、内なる惑星（inner planet）である。私たちは、外的な惑星に対して思案するのと同様に、この内なる惑星にも関心を持つべきである。なぜなら、個人の生と種の未来という双方の観点から見て、内なる惑星に開かれた可能性とそれがさらされている危険性が、決定的に重要なレベルに達しているからである。……身体からのメッセージ、つまり身体の徴候に関するのと同様に、エコロジー問題に対する二つの態度のうちの一つを採ることができる。つまり、私たちは、その問題を「解決する」か、もしくはその問題に「耳を傾ける」か、である。技術的な専門医療は、解決主義的アプローチを大切にして「聴くこと（listening）」を排除した。同じ態度がエコロジーに関するイシューへのアプローチにも広まっている。現象がもつ徴候は認識の外におかれ、もっぱら、成功が技術の効能によって計

ここから，“惑星社会／内なる惑星のフィールドワーク (Exploring the Planetary Society/Inner Planet)” “惑星社会の対話的／対位的フィールドワーク (dialogic and contrapuntal Exploring the Planetary Society)” —— 惑星地球の「地 (terra)」に足をつけ、足をひきずるように、“跛行的に歩む (walking lamely unsymmetrically, contrapuntally and poly/dis-phonically, trascinando le gambe in modo asimmetrico, contrappuntistico e poli/disfonico)” という構想が生み出される。“対話的／対位的に問いかけ続ける (keep asking questions dialogically and contrapuntally)” という点では、前述の「メルッチとの対話」にもあったように“読む”と“フィールドを歩む”の間の“対位法 (punctus contra punctum, contrappunto, counterpoint)” —— 〈地域を“読む”／文を“フィールドワークする”〉²⁷⁾ が組み込まれている。以下、実際のフィールドワークを見ていく。

3 “複合・重合的に練り上げられたフィールドワーク”

メルレルと新原は、1987年以降、サルデーニャ (イタリア自治州)、コルシカ (フランス)、ケルン (ドイツ)、エステルズンド (スウェーデン)、コペンハーゲン・ロスキレ (デンマーク)、サンパウロ・リオデジャネイロ・エスピリトサント (ブラジル)、川崎・鶴見、沖縄、北海道、広島、長崎、マカオ (中国への返還以前)、濟州島 (韓国)、リスボン (ポルトガル)、アゾレス (ポルトガル自治行政区)、カーボベルデ、ストックホルム・エステルズンド (スウェーデン)、オーランド (スウェーデン語が公用語となっているフィンランドの自治領)、ヴァッレ・ダオスタ (イタリア・フランス・スイスの間国境地域)、トレンティーノ＝アルト・アディジェとアルプス山間地 (イタリア・オーストリア・スイスの間国境地域)、フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリアとゴリツィア／ノヴァ・ゴリツァ (イタリア・オーストリア・スロヴェニアの間国境地域)、トリエステからイストリア半島 (イタリア・スロヴェニア・クロアチアの間国境地域)、ランペドゥーザ、メリリヤ、セウタ、ジブラルタルなど、日本社会とヨーロッパ社会とかがわりの深い地域社会、国家の「中心」から見るなら“端／果で”とされるような“境界領域 (cumfinis)”を「理解」するための“探究／探求”をしてきた。

とりわけ近年は、2016年2月にサルデーニャ・ミラノ調査、3月沖縄調査、8月サルデーニャ調査を行い、2017年には、2月サルデーニャ調査、3月に石垣と長崎県の川棚調査などを行

られるような独占的な分野がつくられる。そうして、徴候を取り除くことが、病気を治すことではなく、それを単に別のところに移し替えているにすぎないということを忘れてしまうのである。

27) ここでの「地域」とは、“地域社会／地域／地 (region and community/territory/terra)”の観点から考えられた“場 (luogo, spazio, posto, sito, caso, circostanza, momento, condizione, situazione)”, テリトリー、フィールドである。「文 (text)」とは、まずは書かれたもの (scriptum) であるが、織られたもの (textum) であり、織物 (textile)、織られた結果の手ざわり・舌ざわり・歯ごたえ・きめ・質感 (texture)、ともに織られたものとしての背景・文脈 (context) などと同語源である。

図-1 地中海・ヨーロッパにおけるサルデーニャ、ランペドゥーザ、メリリャ、セウタの位置



出所：大谷晃の助力により作成

い、2018年3月にアフリカからの難民のヨーロッパへの「玄関口」となっているランペドゥーザ調査²⁸⁾、その後のサッサリ、ミラノ調査、そして宮古と石垣での調査と続いている。さらに2018年8月のウィーンとサルデーニャの調査、そして、2019年3月には、「移民・難民の防止フェンス」が建設されたメリリャとセウタ（モロッコ内のスペインの「飛び地」）とイギリスに統治されるスペイン・アンダルシア地方のジブラルタルで調査を行っている²⁹⁾。

惑星地球規模での“比較学（Comparatology, comparatologia）”の根幹となるのは、“地域学（Terranology, terranologia）”である。“地域学”は、区切ることのできない“生存の場としての地域社会の探究／探求（Exploring Communities for Sustainable Ways of Being）”であり、その

28) ランペドゥーザでのフィールドワークは、2018年3月5日にローマにて、メルレルと新原、イタリア研究者の鈴木鉄忠（共愛学園前橋国際大学教員）が合流し、シチリア島のパレルモに移動。パレルモで一泊した後、3月6日の早朝にランペドゥーザに入り、3月9日にランペドゥーザからパレルモ、パレルモからローマ、ローマからアルゲイロという経路でサッサリまで移動している。その後、ランペドゥーザと石垣について、3月10日にサッサリでセミナーを行った後、3月12日早朝にミラノに移動、ミラノより成田に帰国している。

29) 2019年3月15日から24日にかけて、新原と鈴木鉄忠がパリ経由でマラガに入り、マラガでメルレルと合流し、マラガから空路でメリリャ、メリリャからマラガ経由で陸路アンダルシア地方のコスタ・デル・ソルを西へ移動し、アルヘシラスから陸路ジブラルタルへ、さらに海路でセウタへと向かった。

“端／果て (punta estrema/finis mundi)” と “境界領域 (cumfinis)” をフィールドとする。《社会構造の “移行・移動・横断・航海・推移・変転・転変・変化・移ろいの道行き・道程 (passaggio)” に着目し、生起する “複合・重合” 的で “多重／多層／多面” の “うごき (nascent moments of relationship)” をとらえ、個々人と社会の “メタモルフォーゼ (変異 = change form/metamorfosi)” の条件を析出する営み》である。

1987年以降、定期的にサルデーニャを再訪し、区切ることのできないひとつの “社会文化的な島々 (isole socio-culturali)” の複合体としてとらえ、全景把握を試みてきたことの成果は、これまでの各種の論稿、とりわけ、『境界領域への旅——岬からの社会学的探求』³⁰⁾ や『世界地名大事典』³¹⁾ において展開を試みた。

上記の一連のフィールドワークは、惑星社会の諸地域での一時訪問型 (サーベイ型) のフィールドワークと、特定のコミュニティにくりかえし深くかかわるかたち (デイリーワーク型)³²⁾ とが “対比・対話・対位” するフィールドワーク」としての特徴を持つ。すなわち、『対位法』そのものであるような自らの身体を自覚し、その “臨床・臨場 (klinikós)” の場で生きる “智” を求めざるを得なかった人々の “智” の『在りか』に気付き、理解するため、「対位するひとの生そのものと〈合わせ鏡〉となるようなかたちで、フィールドワークそのものも、遠き “端／果て” と近き “端／果て”，外への／内奥への力を、対位的に『抱きかかえる』かたち」³³⁾ のフィールドワークである。ここから、惑星社会のフィールドワークは、いかなる「条件」を必要とするのか。

第一の条件は、“対話的／対位的なフィールドワーク” であることである。“旅をして、出会

30) 新原道信『境界領域への旅——岬からの社会学的探求』大月書店、2007年、119-125頁では、「サルデーニャの “端／果て” の無数の島々」という節を設け、チュニジアからの難民 (もともとは港町ジェノヴァ近郊のリグリア地方からの移民) を収容するため1738年に建設された町カルロフォルテのあるサン・ピエトロ島や、ながらく刑務所の島であったアジナーラ島、原子力潜水艦修理のための基地が置かれたマッダレーナ諸島、基地とされたタヴォラーラ島などをとりあげている。

31) 竹内啓一・手塚章・中村泰三・山本健児編『世界地名大事典 ヨーロッパ・ロシアⅠⅡⅢ』朝倉書店、2016年では、長期にわたって通い、数度にわたって長期滞在をしたサッサリの他、サルデーニャに関するすべての項目 (56項目) を執筆している。そのほとんどすべてが訪れたことのある場所であるのは、メルレルたちが、“旅／フィールドワーク” の同伴者となってくれることなしには成立し得なかった。

32) 梅棹忠夫のフィールドワークを「ステイ型」と「サーベイ型」に分けて、梅棹のテキストを “とらえかえず” 試みをした小長谷有紀の仕事 (梅棹忠夫著、小長谷有紀・佐藤吉文編集『ひらめきをのがさない! 梅棹忠夫、世界の歩き方』勉誠出版、2011年) や、鶴見良行が後に続く「若いひとたち」のために自らのアジアの歩き方を開示した作品 (鶴見良行『辺境学ノート』めこん、1988年) から示唆を受けている。

33) 新原道信「イタリアの “国境地域／境界領域” から惑星社会を見る——ランペドゥーザとサンタ・マリア・ディ・ピサの “臨場・臨床の智” 新原道信編著『“臨場・臨床の智” の工房——国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』中央大学出版部、2019年、158-159頁。

い、比較し、ともに考える (viaggiare, incontrare, comparare e pensare insieme, travel, encounter, compare and think together)”のために、特定の他者を必要とする。他者の声を聴きつつ³⁴⁾、“対話的にふりかえり交わる (riflessione e riflessività)”こと、対話・談話 (dialogo e discorsi)、“対話的なエラボレイション (coelaborazione, elaborazione dialogante)”を、自らの“思行 (pensare/agire, thinking/acting)”のなかに組み込むという意味で、“対話的 (dialogic)”であること。それと同時に、フィールドワークを常に「一所懸命」、すなわち、特定の「一所」であるフィールドに対して「懸命」な全景把握を試みつつも、他方では、“多重／多層／多面”の“対位法”を組み込んだものとするのである。これまでメルレル、メルッチとの間でつくりあげてきた“対話的／対位的なフィールドワーク”が、他者から見れば、「国際」であったり、「ミクロ」であったり、「内面的」であったりと、いくつもの「顔」を持つと考えられる理由となっている。

このフィールドワークは、あらかじめ設計したかたちでのフィールドワークとはならず、「“うごきの場”を選ぶと同時に、引き寄せられ、引き込まれ、巻き込まれる。場とそこに生きる人々の懐に入り込み、その場の水底から流動する全景を把握していく」³⁵⁾という“旅程”を必要とする。それゆえ、このフィールドワークによって、実は「すでに出会っていた」ことに後から気付くための時間と経験の自然な集積——“異郷／異教／異境”での「体験をくりかえし束ね、その意味を学びとる (accumulated experience, apprendere dall'esperienza)」ことが必要となる。

それゆえ、第二の条件は、自然な集積のかたちで束ねられた経験による「晩年の様式 (late style, stile tardo)」としての特徴を持つこととなる。すなわち、“複合・重合的に練り上げられたフィールドワーク (ricerca sul campo elaborato in modo composito, Fieldwork elaborated in a composite way)”であることが条件となる。

“旅程”の“複合・重合性 (compisitezza, compositeness)”は、以下の位相によって構成されている：

- ① “最初で一度きりの訪問 (prima e unica visita, first and one-shot visit)”……一度きりであったのかもしれない訪問 (visita che potrebbe essere stata una volta, visit that may have been once)。特殊性・具体性・一回性，“一期一会 (incontro unico nella vita, once-in-a-lifetime encounter)”の性格を持つ。
- ② “長期滞在と関与 (lungo soggiorno e coinvolgimento, long stay and involvement)”……

34) メルッチは、この聴くことによる“対話的なエラボレイション”を晩期の最重要課題とした。Melucci, Alberto, “Sociology of Listening, Listening to Sociology”, 2000 (=新原道信訳「聴くことの社会学」地域社会学会編『市民と地域—自己決定・協働, その主体 地域社会学会年報13』ハーベスト社, 2001年)。

35) 新原道信「あとがき—ささやかな『“思行”の冒険』として」新原道信編著『“臨場・臨床の智”の工房—国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』中央大学出版部, 2019年, 481-482頁。

“異郷／異教／異境”の地において日常性を生きるなかで感じ、考え、“巻き込まれ／引き込まれ (being involved with the field, essere coinvolti con il campo)”, “コミットメント (commitment, impegno)” の在り方 (ways of being) が試されていく。

- ③ “再訪と新たなつながり (visita ricorsiva e nuovi legami, recursive visit and new bonds)” …… “ふたたびの土地 (terra visitata di nuovo, terra visited again)” を “抱きしめ／呑み込み (abbracciare e dedicarsi a/incorporare, embracing/incorporate)”, そして, “声をかけられたら, なんとかありあわせの道具で現実の課題に応答するという生き方・哲学 (filosofia di disponibilità)” が試され, つくられていく. そのなかで新たな関係性を切り結び続ける (ricostellando la relazione, reconstellating the relationship).

たとえば, 最初のサルデーニャ訪問は, サーベイ型の聴き取り調査とフィールドワークであり, これに続いて長期滞在を行った. 日本への「帰還」の後, くりかえし, 再訪し, また, サルデーニャ調査と機縁のある土地に足を運ぶなかで, 「すでに出会っていた」ことがらの意味を “とらえかえす” ことになり, そのなかで, 〈エピステモロジー／メソドロジー／メソッズ／データ〉の “組み直し” がなされていった³⁶⁾.

上記の②と③の体験を重ね合わせること (accumulated experience, apprendere dall'esperienza) によって, “うごき (nascent moments of relationship)” の “場 (luogo, spazio, posto, sito, caso, circostanza, momento, condizione, situazione)” に “居合わせる (being there by accident at the nascent moments in which critical events take place)” 可能性を確保するという 〈エピステモロジー／メソドロジー／メソッズ／データ〉を少しずつ練り上げていったことになる。

4 ウイーンとアジナーラ島のフィールドワーク

以下では, “うごき (nascent moments of relationship)” を “とらえかえす (comprendere di nuovo, comprehend again)” 方法としての惑星社会のフィールドワークの現場を見ていく. これまでも, サルデーニャの内なる “社会文化的な島々” ——原潜基地があったマッダレーナ諸島や, 刑務所があったアジナーラ島, 飛行場が建設されたフェルティリア (ファシズム時代に建設されたアルゲーロ近郊の町) などの調査研究をしてきていた.

前述の「条件」とのかかわりで述べるなら, アジナーラ調査は, 同時にすすめていたランペドゥーザ, メリリヤ, セウタ, ジブラルタル, 石垣, 宮古, 長崎・川棚などの “訪問” 型の調

36) この “たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立つ” “ともに (共に／伴って／友として) 創ることを始める” プロセスを, 新原道信『ホモ・モーベンスー旅する社会学』窓社, 1997年で最初にまとめ, さらに蓄積した経験を束ねるかたちで, 新原道信『旅をして, 出会い, とともに考える一大学で初めてフィールドワークをするひとのために』中央大学出版部, 2011年をとりまとめた.

査と立川とサッサリですすめてきた“関与”型の調査³⁷⁾の“対位法”のなかの比較の“基点／起点”のひとつとして位置づけられていた。また“複合・重合性”の観点では、新原にとっては、“最初で一度きりの訪問（*prima e unica visita, first and one-shot visit*）”であり、メルレルにとっては“ふたたびの土地（*terra visitata di nuovo, terra visited again*）”³⁸⁾であった。

2018年の“再訪”は、7月30日から8月8日の日程で、7月30日から8月1日のウイーン“再訪”は、ウイーン大学出身の家族との再会、8月1日からのサルデーニャ“再訪”は、メルレルとの再会を主要な目的としていた。ウイーン“再訪”では「3.11」以降の状況を確認し、サルデーニャ“再訪”では、“社会文化的な島嶼性論”から見た社会の現在についての見方を“交感／交換／交歓（*scambio, Verkehr*）”することにあつた。

以下、時間軸に沿って、ここでの“再訪（*visita ricorsiva, recursive visit*）”を“始める（*beginning to*）”プロセスを辿っていく。アジナーラ島に入る前のウイーン“再訪”から、フィールドノーツを“とらえかえして”いく。

2018年7月30日（月）～2018年8月1日（水） ウイーン

再会したのは、「3.11」以前に、日本で働き、生活の基盤を日本で作っていたが、「3.11」以降の状況の変化のなかで、生活が大きく変わった家族だった。現在は、インスブルックに住み、筆者の家族と再会するためウイーンまでやって来ていた。

37) “訪問”型は、サルデーニャ（イタリア）、沖縄・対島・周防大島、コルシカ（フランス）、リスボン・アブレス（ポルトガル）、カーボベルデ、ヘルシンキ・ミッケリ・オーランド（フィンランド）、ヴァッレ・ダオスタ、トレンティーノ＝アルト・アディジェとアルプス山間地、フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリアとゴリツィア／ノヴァ・ゴリツァ、トリエステからイストリア（いずれもイタリアの間国境地域）などの調査研究である。“関与”型は、在住外国人の子どもたちが多数暮らす公営団地をフィールドとした「湘南プロジェクト」と、“移動民の子どもたち（*children of immigrants*）”のネットワークを対象とした「聴け！プロジェクト」で、10年以上にわたる“参与”によって、異質性が衝突・混交する「網の目」の把握を試みたものである。現在は、立川・砂川地区とサッサリのサンタ・マリア・ディ・ピサ（*Santa Maria di Pisa*）地区で同様の“コミュニティを基盤とする参与的調査研究（*Community-Based Participatory Research (CBPR)*）”に取り組んでいる。

38) 1990年代半ばに、メルレルたちの研究チームに在外研究中の新原も参加した異文化交流プロジェクト「壁をこえて（*Oltre il muro*）」は、サッサリ市郊外に位置したのリツェッドゥ精神病院の地域開放運動との協業、まだ刑務所が存在していた頃のアジナーラ島の受刑者との間でCala d'Olivaで行った異文化セミナーを行った。今回のアジナーラ訪問は、「もう一度もまた最初から（*di nuovo*）」を関係性を“組み直す”という意味を持った試みであった。異文化交流プロジェクト「壁をこえて（*Oltre il muro*）」については、新原道信「境界領域の思想—『辺境』のイタリア知識人論ノート」『現代思想』vol.26-3, 1998年, 234-248頁、および、新原道信「惑星社会のフィールドワークにむけてのリフレクシヴな調査研究」新原道信編著『うごきの場に居合わせる—公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』中央大学出版部, 2016年, 64-65頁と新原道信「イタリアの“国境地域／境界領域”から惑星社会を見る—ランベドゥーザとサンタ・マリア・ディ・ピサの“臨場・臨床の智”」新原道信編著『“臨場・臨床の智”の工房—国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』中央大学出版部, 2019年, 187-188頁を参照されたい。

ウイーン“再訪”中は、移動日である7月30日と8月1日も含めて、ほとんどの時間をともに過ごし、政治や社会の現在についての理解を「対話・談話 (dialogo e discorsi)」形式で交換するだけでなく、家族の“固有の生の軌跡 (roots and route of the inner planet)”についての情動も含めた“交感／交換／交歓 (scambio, Verkehr)”をした。そのなかで、およそ以下のようなかたちで、“対話的にふりかえり交わる (riflessione e riflessività)”ことを試みた：

福島第一原発のメルトダウンの後、オーストリア大使館から、家族をつれて飛行場に向かうか、あるいはまず西日本に移動し、そこからチャーター便で帰国せよとの連絡が入った。仕事もあるのでと思い、躊躇していたところ、当時働いていたワイン輸入会社のオーストリア人の上司からも、至急避難せよとの緊急連絡が入る。西宮の知人をたよって車で西へと移動し、ビジネスホテルで一泊した後、二週間ほど知人宅に寄宿させてもらった。娘が小学校への入学を控えていたため、ひとまず東京にもどった。子どもたちには尿検査をさせていたが、セシウムが発見された。このことについて、小学校の父母会で話したところ、他の父母たちから、「そんなことは言わないほうがいい。『放射能がうつる (伝染する)』といって』他の子どもたちからいじめられることになるから」と言われる。この偏見の根深さに絶望的な気持ちになる。放射能の危険に加えて、この社会でオーストリアと日本双方の文化を受け継ぐ子どもたちを育てることの困難を考えた。2012年の春、1994年の留学から築き上げてきた日本での仕事と暮らしをすべて手放し、故郷インスブルックに家族四人で「帰還」することを決意した。故郷では、かつて手にしていたような好条件の仕事につくことは難しく、単発の通訳や翻訳の仕事、旅行ガイドなどをしながら暮らすこととなった。日本人の妻は、インスブルックでの暮らしに適応し、短期間でドイツ語を習得した後、英語の使える製薬会社で働き、生計を支えた。子どもたちは、ドイツ語と日本語に加えて、英語やフランス語を学びつつある。父の「故郷」である「異郷」の地で、教育熱心な親のもとで、すこやかに育っている。そうではあるのだが、本当にこの選択が正しかったのか、子どもたちの人生を変えてしまったのではないかと、くりかえし考え続けてもいる。

自分たちの後にシリアからの難民がインスブルックの地域や学校に入って来た。知的で階層も高く、すぐにドイツ語にも社会にも適応している。

今回の再会では、オーストリアへの難民・移民の急増と“「壁」の増殖 (proliferation of 'barrier')”について、地域生活者としてどのように感じ、考えているのかを聴くことを想定していた。しかし、話は、「やって来た」「異質なひとたち」についてではなく、不確実さを増すグローバル社会のなかで生み出された“受難者／受難民 (homines patientes)”としての自分た

図-2 地中海におけるアジナーラ島の位置



出所：大谷晃の助力により作成

ちの「3.11」の体験を通じて、インスブルックで「新たな隣人」となった人々のことを“感知／感応”するという回路がつくられていると考えられるものだった。

2018年8月2日（木） サッサリ

ウイーンからローマを経由して、サルデーニャ州北西部の主要都市サッサリに到着し、今回のサッサリ滞在中のプログラムをメルレルと相談して決めた。“再訪”におけるプログラムの組み立ては、社会の現在についての理解の交換を集中的に行うことを基本として、すでに一緒に訪れ、かわり続けているフィールドへの“再訪”（“再訪”のなかの“再訪”）に加えて、“最初で一度きりの訪問（prima e unica visita, first and one-shot visit）”を組み込むようにしている。その理由は、メルレルとの間で練り上げてきた“探求型フィールドワーク（Exploratory Fieldwork）”，方法としての“旅（voyage for learning/unlearning in the field）”が、おたがいにとっての“異郷／異教／異境”の要素を組み込むことによって、理解の配置変え（reconstellation/ricostellazione），さらには“メタモルフォーゼ（changing form/metamorfosi）”が起こる可能性を高めることを企図しているからである。

今回は、アジナーラ島への“訪問”を企図することとなり、メルレルとの間では、あらかじめ以下のような事実を確認した：

アジナーラ島は、ピサ、ジェノヴァ、アラゴン、サヴォイア家（サルデーニャ王国）などが領有・植民してきた。アジナーラ島の北東部のCala d'Olivaには、もともと漁師の村

があった。ティレニア海に面したラツィオ州の島ポンツァやアドリア海に面したプーリア州の島サン・ニコラ、あるいはサルデーニャ北東部のコルシカに面した島ラ・マッダレーナなどの島々からやって来た漁師たちだった。その後、航海中に病気になった船乗りの検疫所、さらには、「島送り」の刑務所へと姿を変えていく。

1885年に、島全体を刑務所と受刑者が農業などに従事するコロニー (colonia penale)、隔離病棟 (lazzaretto) の全制的施設 (total institution) とするため、住民には立ち退きが命ぜられた。サルデーニャ本島の都市サッサリやポルト・トーレスから来た住民たちは、「故郷」にもどった。他方で、他の地中海の島々からやって来て何世代も経ってしまっていた家族たちには、帰る先がなかった。

そこで、サルデーニャ本島北西部の無人の土地 Nurra (先史時代サルデーニャの巨石建造物 Nuraghe に由来する地名と言われている) に、スティンティーノという町を建設した (最初に入植した45家族の顕彰碑がいまも遺されている)。最初、スティンティーノに行く陸路はなく、船でのみ到達することが出来た。スティンティーノでは、ピサ、ジェノヴァ、コルシカ、サッサリなどの言葉などが混じったサルデーニャ語が話されていた。

1915年から1916年にかけて、第一次世界大戦中、オーストリア・ハンガリー帝国とセルビアとの戦争で、捕虜となったオーストリア・ハンガリー帝国の兵士が、セルビアとイタリア政府の交渉で、陸路セルビアからアルバニアまで歩き、アルバニアから船でアジナーラ島へと運ばれた。約66,000人の捕虜 (チェコ、ポーランド、イストリアなど) が移送され、大半が死に、残ったのは29,000人だった。オツィエーリ文学賞 (Premio Ozieri) を受賞した詩人ステファノ・フローレ (Stefano Flore) が、この捕虜の証言に基づくサルデーニャ語の詩集を出版している (Istèvene Flore (Stefano Flore のサルデーニャ語名), *Avansos de memòria dae Nisch a s'Asinara*, 2017年に *Il mio libro* を版元として自費出版)。

Cala Realeには、航海者たちの検疫所 (Stazione Sanitaria Marittima Quaranteneria di Cala Reale) と隔離病棟 (lazzaretto) があった。Cala d'Olivaには、後にマフィアに暗殺された裁判官ファルコーネ (Giovanni Falcone) と治安判事ボルセリーノ (Paolo Borsellino) が身の安全のために、滞在したこともあった。また、「大物マフィア」も秘密裏に収容されていた。

1936年から1941年にかけて、イタリアがエチオピアを侵略し、エチオピアの王族をこの島に幽閉した。

1960年代から1980年代初頭にかけてのイタリアでは、複数の誘拐・殺人・爆弾テロ事件が勃発し、「鉛の時代 (anni di piombo)」と呼ばれた。そのなかで、武装組織「赤い旅団 (Brigata Rossa) などの凶悪犯」を収容する特別刑務所 (carcere di massima sicurezza)

がFornelliに作られた。その後、1970年代後半には、囚人の反乱も起こり、警備はさらに強化された。この「隔離」「封鎖」の状態が、1885年から続いたが、1997年にアジナーラ国立公園となり受刑者の農業コロニーも閉鎖、1998年は特別刑務所も閉鎖された。2002年には、アジナーラ海洋保護区（Area marina protetta Isola dell'Asinara）の法令が制定された。

この話し合いを終えて、いっしょにサッサリ市中心部イタリア通りの食堂に行くと、サッサリ大学でアラビア語を教えているエリアスと遭遇する。レバノン人の彼は、1987年にやって来て以来ずっとサッサリに暮らしている。家族はすべて離散し、アブダビやアメリカに暮らす。現在の難民の状況を憂い、かつての“受難者／受難民（homines patientes）”であった自分を受け入れてくれたサッサリ大学の「人間味」が失われてきていることを嘆いていた。

図-3 アジナーラ島の地図



出所：大谷晃の助力により作成

2018年8月3日（金） サッサリ アジナーラ島へ

朝、メルレルが迎えに来てくれて、7時半にサッサリを出発する。途中の道は、スティンティーノに向かう車で渋滞している。メルレルの妻ニーナの父上は、サルデーニャ内陸部の町ビッティからスティンティーノ近くの土地 Ezzi Mannu（grande e vecchio 大きくて古いの意味）にやって来て、定住型の牧畜経営者（allevatore）をしていた。

スティンティーノの市街を越えて、ペローザ・ビーチ（Spiaggia La Pelosa）へと向かう。ま

だ午前 8 時だが、駐車スペースは満杯となっている。観光客の増加による環境の劣化への対応策として、砂浜に直接バスタオルを置くことが禁止されていた。ペローザは、何度も来た場所だったが、その場所がいつの間にか、日本語版のインターネットで「スティンティーノのビーチ」と紹介されている。友人たちに何度か連れてきてもらった遠浅の海が、web 上のトリップアドバイザーでの映像と口コミに基づく選択の対象となっている。バーチャルな情報を確認し、自分もまた「信じがたいほど美しいビーチ」といった情報を発信するために日本からやって来るのだ。

ここから船着き場 (Stintino Marina) へと向かい、本日の案内役であるサルデーニャ州政府公認ガイドのセルジオと出会う。島内一周プログラムに同道するメンバーは 8 名 (ロンバルディアからやって来た四人家族 (15 歳の姉, 10 歳の弟) と女性二人組, メルレルと筆者) で、転倒防止のため裸足となってからゴムボートに乗り込む。気持ちのよい海風を浴び、ペローザ・ビーチと (サッサリの代表的な名家・ベルリングエル家が所有していた) ピアーナ島 (Isola Piana) を遠望しつつ、アジナーラ島へと向かう。

「鉛の時代」に「赤い旅団 (Brigata Rossa)」が収容されていた特別刑務所があった Fornelli に到着し、ゴムボートから四輪駆動車へと乗り換える。船着き場から西に位置する海岸部へと分け入り、海神ポセイドンに由来する名前を持つ海草ポジドニア・オチエアニカ (Posidonia oceanica, 地中海の砂浜に棲息する海草) の説明から入った：

これから南北 18km ほどの大きさの島の入り組んだ海岸沿いの道を北上していく。アジナーラは、最初の植民から、112 年ほど刑務所の島の歴史、そして海洋保護のための国立公園へと変化してきた。17 世紀末に Cala d'Oliva への最初の入植者があり、1885 年には四世代を経ていたが、ウンベルト I 世の要請で、トスカーナ諸島ピアノーザ (Isola Pianosa) の刑務所を模した刑務所の島とするため、住民は強制退去させられた。ピアノーザ島の少し北には、ナポレオンの流刑地となったエルバ島がある。強制退去させられた補償金で土地を買い、サルデーニャ出身者以外の 45 家族でスティンティーノの町をつくった。

地中海の島々は、有限ではあるが安定した共生を可能とするエコシステムによって生存が確保されていた。しかし、この有限なシステムに対して、人間が過剰な負担をかけ、限界をこえて蕩尽してしまえば、木も植物も元にはもどらなくなる。貴重な樹木を使い果たしたことで、巨石文明が崩壊したイースター島のようにになってしまう。しかし、住民たちはこうした過去の過ちの歴史を記憶してはいない。

アジナーラ島には、ローマ帝国以降の文明による蕩尽の対象となったサルデーニャ本島にはもはや存在しない地中海のエコシステムがまだ遺されている。この島の植物相 (flora) と動物相 (fauna) を支えているのは、推定寿命 20 万年ともされる海草ポジドニア

(Posidonia)であり、遠浅の砂浜を生み出してきた。陸と海との間のやわらかなクッションの役割を果たすことで、海が荒れたときの陸土の流失を防ぐことが出来た。その後、刑務所の島である時代が続いたことで、ポジドニア (Posidonia) の群生が維持され、海面下から海上へと続く森 (bosco della Posidonia) が遺されている。

海浜からすぐに始まる草原には野生の馬やロバが歩いている。海岸近くにも草を食む姿を見ることが出来る。

海岸近くには、淡水中に海水が混じった汽水湖が複数存在している。汽水湖ごとに異なった相の植物・鳥・昆虫が棲息し、生物多様性をつくり出している。

いまの時点で、「自然が豊かに遺されている」と感じるかもしれないが、過去の文章を見ると、開発の影響があったことがわかってくる。たとえば、1860年頃に存在していたFornelli近辺の森は、鉱山開発の影響で失われた。さきほど見た汽水湖も、もともとは淡水湖であった。つまりは、私たちがいま分け入った「草原 (pianura erbosa)」は、「開発によって生み出された荒野 (il deserto creato dallo sviluppo)」であるのだ。

海岸部から、野生の馬やロバが暮らす草原近くの汽水湖 (Stagno Spalmadri) の植物・動物相を観察した後、草原を抜けて、丘陵地帯を車で上り、「赤い旅団などの凶悪犯のための特別刑務所の島」というイメージのもととなった特別刑務所、刑務所の施設として建造された二つのダム (Diga di Fornelli, Diga di Santa Maria) を見学する。

ここから島を北上し、性犯罪者を収容した施設のあったTumbarinoから、軍政下の農業施設跡のあるStrettiへと向かう。ぎゅっとしめつけられた (stretto) という名のように、わずか数百メートルの地峡をはさんで、西側は岩場、東側は砂浜となっており、二つの異なる海が島の地峡の両側に存在している。

移動する細い道の両脇には、他の地中海諸地域では絶滅してしまった地中海固有の植物が群生している。ここには、第一次大戦時から1952年まで使用されていた刑務所の農業施設の廃墟が存在し、病院跡、兵舎跡など、その痕跡が遺っている。第一次大戦中はセルビアの兵士がここに連行され、多くが病死したという。

さらに北上し、オーストリア＝ハンガリー帝国の戦没兵士の墓を通り過ぎて、Cara Realeに到着する。ここには、航海者たちの伝染病感染を確認する検疫所 (Stazione Sanitaria Marittima Quaranteneria di Cala Reale) があり、サルデーニャに上陸する船員は40日間ここに拘留され、感染者は隔離病棟 (lazzaretto) に収容された。感染の可能性のある医師や職員もここから出ることは出来なかった。

さらに北上し、受刑者たちの農業コロニーが眼に入る。ここに暮らす罪人たちは、肉、サラミ、チーズ、皮革、ワインづくりなどの生業に従事した。受刑者たちのぶどう園があったTrabuc-

cato を経て、刑務所の本部・職員の宿舎・学校・教会などが置かれた Cala d'Oliva に到着する。Cala d'Oliva では、マフィアとたたかったボルセリーノとファルコーネのゲストハウス、現在は、刑務所関連の資料を集めた資料館となっている囚人監視所跡を見学した。

今回の「島内一周ツアー」は、セルジオがメルレルと筆者の要望に応えるかたちで、刑務所関連の史跡ばかりをめぐったため、「きれいな海を見るためにやって来た顧客への配慮」として、Punta Sabina 近くの入江 Cala Giordano まで悪路を走破し、小さな湾内の遠浅の浜で海水浴をする時間をとった。すでに「先客」が場所を占めており、案内役のドライバーは、顧客にリキュールなどの酒をふるまい、大騒ぎをしていた。そして、セルジオに対して、「おまえなんでもっと儲かるやり方をしないんだ」と皮肉めいた口調で挑発を繰り返し、セルジオは慥然としているように見えた。

ここに来るまでの間にも、セルジオは、希少種の白いロバにふれようとする観光客や、貴重な植物が生えている原野に入って行こうとする観光客に厳しく注意をしていた。同乗者の「(ロンバルディアからやって来た) 本土人」とセルジオとの間でも、緊張感をともなったやりとりがあった。たとえば、「サルデーニャ人は海は自分たちのものではなく侵略者のものだと思っていた」というセルジオの説明に対して、「あなたたちサルデーニャ人は、イタリア人と比べてちょっと変 (strano) ね?」といった返答があったときだ。

「うんわかった。私が変わとしたら、灼熱の道を車で来たけれど、いま車を降りて、ここから15km 歩いて船着き場まで帰るかい? 変なのは私たちでなく海だけを見に来て、その土地を理解しないあなたたちのほうだ」といったやりとりがあった。その後もセルジオは、機会をとらえ、くりかえし、「フェニキア、カルタゴ、ローマ、ピサ、ジェノヴァ、コルシカ、ナポレオン……サルデーニャの海をよく識り、その海をわがものにした侵略者たちがやって来た」という話をしたが、顧客たちはもはや反論はせず、ただやり過ごしていた。

「海水浴」からの帰路、車内の言葉は少なくなり、Fornelli から Stintino Marina へともどった。ゴムボートから下船した後、セルジオは、メルレルと筆者をぜひにと誘い、このマリーナにあるただ一つのカフェである Chiosco Bar P26 にてゆっくりと話すことになった。イタリア語、サルデーニャ語、英語、ドイツ語の話者である35歳のセルジオは、ドイツに経済移民として働きにいった両親のもとで生まれ育った。高校を卒業する (Abitur を得る) 前、16歳からフォルクスワーゲンの自動車組み立て工場で働いた。旧ユーゴの工場に派遣されたりもした。身体をこわし、大学への進学を考え退職し、ニュージーランドへの留学を経て、両親の故郷であるサルデーニャのサッサリ大学教育科学部に入学した。州政府の研修を受け、州政府公認の旅行ガイドとして夏は働き、冬は大学にもどるという生活をしている。ガイドをしながら、この場所の「ほぼ手つかず」の自然が持つ意味について観光客に伝えるため、「日々闘っている (lotta continua) のだ」という。

Barの支払いを申し出たが「ここはぼくの『地元』ですから」と固辞され、しかたなく好意に甘える。メルレルが自分の大学・学部の前教授だったからというわけではない。自分がやっていること、自分の「闘い」を理解してもらったことへの御礼という意味がこめられていた。Fornelliの港に向かう道すがら、「客や同業者たちからは『変わり者』だと言われているが、自分のやっていることは無駄ではないと思ってやっている。現に研究者たちも注目してくれている」と話した。ロンバルディア州のクレモナからやって来た女性客たちから「いつ、誰が？」と聞かれ、「メルレル先生と新原（ミチ）先生」と答えていた。

この“再訪”（“再訪”のなかの“最初で一度きりの訪問”と“再訪”の混成も含めて）において、マングローブの根のように他端／多端へと伸びていく可能性の芽はどこにあったか。ここからの知見については、あらためて、より深く考察する必要があるが、今回は、まだ実証的とは成り得ていない着想をいくつか指摘するのみにとどめる。

メルレルと新原は、「9.11」からアフガニスタン、イラク、世界金融危機、さらに東日本大震災と、地球規模のシステム化・グローバル化がもたらす“受難者／受難民 (homines patientes)”の増大、個々人の社会的痛苦に起因する社会紛争と社会統合の危機の意味を考えてきた。ベルリンの壁崩壊から東欧革命、アラブの春といった潮流を逆転させるかのように、いま私たちは、「壁」の増殖 (proliferation of 'barrier') に直面している。「壁」の増殖と“受難者／受難民”の増大に対峙するため、ランベドゥーザ、メリリヤ、セウタ、ジブラルタルなどでの調査を行ってきた³⁹⁾。

ウイーンでは、「3.11」と現在の「壁」の増殖によって生み出された「シリア難民」の体験が、インスブルックに「避難／帰還」した家族の“心身／身心現象”として束ねられた。

サッサリでは、かつての「願望のヨーロッパ」へのレバノンからの「避難」と「壁」の増殖するヨーロッパの現在とが対比されていた。サッサリ大学では、前述のエリアスのみならず、メルレルたちの支援によって、これまでも様々な“受難者／受難民 (homines patientes)”を教員として受け入れてきた。たとえば、1973年9月11日のチリ・クーデター (Golpe de Estado Chileno) から亡命した文学者のヘルナン・ロヨラ (Hernán Loyola) も、ハンガリー、ボルドーからサッサリへと「流れ着き」、メルレルの盟友となった⁴⁰⁾。

39) 「壁」の増殖 (proliferation of 'barrier') をめぐるフィールドワークについては、新原道信「願望のヨーロッパ・再考—「壁」の増殖に対峙する“共存・共在の智”にむけての探求型フィールドワーク」『横浜市立大学論叢 社会科学系列』71巻2号、2020年、145-166頁を参照されたい。

40) ネルエダとともにチリの共産党の闘士でもあった老学者は、ネルエダの作品研究に関する重要な著作を多数刊行している。三回の結婚をして、子どもたちや孫は、ハンガリーやイタリアでくらしている。チリの政変後すぐにイタリア大使館に助けを求めたことが機縁となって、イタリアに到着し、メルレルたちヨーロッパのラテンアメリカ研究者が、チリから亡命した大学教員の地位確保のために奔走した。

同じくメルレルの盟友である詩人ステファノが、捕虜の証言による詩集を出版したのも、自らの「本土」での体験と過去の兵士の体験とが束ねられたからだと考えられる⁴¹⁾。

そしてまた、“移動民の子どもたち (children of immigrants)” の一人であったセルジオは、サルデーニャへと「帰還」し、周囲と「闘い」つつ、地中海という“複合・重合性 (compisitezza, compositeness)” をもった世界の“通奏低音 (basso continuo)” となっている海草ポジドニアに“巻き込まれ／引き込まれ”，“名代 (procuratore, proxy)” となることを自然と選び取っている⁴²⁾。

ウイーンとアジナーラで出会ったのは何か、時間・空間を横断し、個的で深い体験の“衝突・混交・混成・重合のうごき (movimenti compositi)” のなかで、“心身／身心現象” が起こっている。石牟礼道子や緒方正人、マーフィーやメルッチたちのように、“身体の奥の眼から惑星を見る (vedere il pianeta intero e interno dagli occhi dietro il corpo)” という“心身／身心現象” である。

5 おわりに——惑星地球に拘束された社会を生きるものが生身で行う “思行” の「現象学」としてのフィールドワーク

2018年の“再訪”では、アジナーラ訪問の後に、メルレルたちの調査研究チームが、“コミュニティを基盤とする参与的調査研究 (Community-Based Participatory Research (CBPR))” のフィールドと深くかかわってきたサンタ・マリア・デイ・ピサ (Santa Maria di Pisa) 地区を“再訪”し、それ以外の時間は、共同研究の具体的展開について、2019年3月に予定されていたメリリヤ、セウタ、ジブラルタルでの調査の意味についての確認、そもそも30年以上にわたってともにつくりあげてきた〈エピステモロジー／メソドロロジー／メソッズ／データ〉の現在についての話をした。

2018年8月の時点における、“(軸足をずらし) 揺れうごきつつかたちを変えていく (playing and changing form)” “惑星社会のフィールドワーク” の〈エピステモロジー／メソドロロジー／メソッズ／データ〉は以下のようなものだった⁴³⁾：

41) ステファノについては、新原道信「地中海の『クレオール』—生成する“サルデーニャ人”」『現代思想』vol.24-13, 1996年11月, 8-17頁で、身体に刻み込まれた移動の歴史について論じている。

42) こうした“出会い (incontro)” については、新原道信「“移動民 (homo movens)” の出会い方」『現代思想』vol.25-1, 1997年1月, 212-218頁で言及している。

43) ここでの整理は、2018年8月のフィールドノーツをもとに、新原道信「『同時代のこと』」に回答する“臨場・臨床の智”—かたちを変えつつうごいていく“智”の工房 新原道信編著『“臨場・臨床の智”の工房—国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』中央大学出版部, 2019年, 451-454頁でおこなった考察の“とらえかえし”を試みたものである。

- ① “惑星社会のフィールドワーク（Esplorando ricerca sul campo nella società planetaria）”は、惑星社会の各所における“最初で一度きりの訪問”型のフィールドワークと、“関与”型の地域活動とが併存している。
- ② 参与的調査研究のなかで、調査者と当事者の境界線はうごいていく。
- ③ 比較は、データの間での比較のみならず、フィールドのうごきと調査者のうごきも含めての考察となる。調査者が調査の社会文化的プロセスの渦中にあり、当事者との関係性の“うごき”のなかで、当初の「計画」から“ぶれてはみ出す”ことを明示化し“舞台裏”のプロセスも含めて、考察の範囲とする。
- ④ 調査研究活動は、身近な場における〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉を常に確保しつつ、同様の試みを続けている他者との間での継続的かつ緊密な“対話的なエラボレーション”により、〈エピステモロジー／メソドロジー／メソッズ／データ〉を“共創・共成”している。
- ⑤ “コミュニティを基盤とする参与的調査研究”は、という意味で、フィールド／調査者のコミュニティ自体が、社会そのものに波及する“うごき”をつくっていく調査研究である。
- ⑥ フィールドとそこに暮らす人々を、“社会文化的な島嶼性論（visione di insularità socio-culturale）”から“とらえかえす”⁴⁴⁾。
- ⑦ 以上の方向性を、“交感／交換／交歓”し、“拘束と絆”とともに、具体的に小さなことをこの惑星の異なる場でやり続けることで、比較学（comparatologia, comparatology, comparative socio-cultural studies）として錬磨していく。

ここでもう一度、本稿の“問いかけ（interrogazione, ask questions）”に立ち返ってみる：

「近代性モダニティに関するパラダイム」を内面化し、全方位的で複合的な都市化、脱自然化、文化・化、（電）脳化の果てにある私たちが、惑星社会のフィールドワーク—「一本の葦（un roseau）」^{あし}であるような人間自らの足で惑星地球に立ち、寡黙で鈍足、跛行的に歩むフィールドワークによって、私たちがいまそこで生きる惑星社会の諸問題を引き受け／応答するには、いかなる条件を必要とするのか？

44) メルレルの“社会文化的な島嶼性論”による現代社会認識と実際のフィールドワークについては、新原道信「A.メルレルの“社会文化的な島々”から世界をみる試み—“境界領域の智”への社会学的探求（1）」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学27号（通巻268号）2017年、73-96頁、さらに、新原道信「惑星社会の諸問題を引き受け／応答する“臨場・臨床の智”に向けて—“惑星社会のフィールドワーク”は現代社会認識に寄与するのか」新原道信・宮野勝・鳴子博子編著『地球社会の複合的諸問題への応答の試み』中央大学出版部、2020年、43-82頁で展開している。

本稿の 2 節と 3 節の考察で明らかとしたのは以下の条件である：

- I. “対話的／対位的なフィールドワーク”であること、特定の他者を必要とする、他者の声を聴きつつ、それと同時に、“多重／多層／多面”の“対位法”を組み込んだフィールドワークを同時的に行うこと。
- II. 「晩年の様式」としての“複合・重合的に練り上げられたフィールドワーク”であること。

本稿の 4 節では、上記の I と II の条件の下での日々の営み（デイリーワーク）としてすすめてある“惑星社会のフィールドワーク”の一端としてのウィーンとアジナーラ調査についてのリフレクションを行った。

「流動的な状態のまま」「いまだ構築の途上」にある“旅程”のおわりに、本稿の対話者となってもらったメルッチの著『プレイング・セルフ』の「イントロダクション」から、本稿の冒頭でエピグラフとして紹介した言葉に続く文章を本稿の結びとして提示したい。

メルッチは、「循環し、迂回していくような道筋 (circular path, relazione circolare)」は、「現象学的にならざるを得ない」と述べた。ここでの「現象学的」とは、実は、上記の二つの条件と、共鳴・共振する (resonating, risonando) 内容をもった学である。「フィールドにおける労苦や情熱に巻き込まれ」「プロセスに」「境界領域」「前人未踏の地」「ともに旅を」する。ここでは、「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由 (a freedom that urges everyone to take responsibility for change)」⁴⁵⁾ に身を委ね、「(我が) 身を投ずる」(上野英信)、「我が身を持って証しを立てる (sich betätigen)」(ヘーゲル) ことが求められる。その意味では、惑星地球と惑星社会の「限界を受け容れる自由 (free acceptance of our limits)」⁴⁶⁾ をともなった徹底した現

45) 「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由」については、新原道信「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由をめぐって—古城利明と A. メルッチの問題提起に即して」『法学新報』115 巻, 9・10 号, 2009 年, 697-722 頁で論じている。

46) Melucci (1996a=2008), 78-79 頁の下記のメルッチの言葉から来ている。尚、「限界を受け容れる自由」については、新原道信「A. メルッチの『限界を受け容れる自由』とともに—3.11 以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求 (1)」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 24 号 (通巻 253 号), 2014 年, 41-66 頁で論じている：

可能性のフィールドが、ある一定の範囲をこえて拡張すると、境界 (boundaries) の問題は、個人的および集合的な生活にとって最重要となる。その背後には、選択、不確実性、リスクといった問題があり、この問題は、複雑性の超高度化したテクノロジーのシナリオのなかで、人間の体験の限界—そして自由—を新たなものになっている。社会が自らを破壊できる力を備え、何ら保証もない選択に個人の生活が依存しているような時代において、どこに私たちの境界線を置くのか、これが人間生活の向き合うべき課題である。今日では、私たちの境界線をどこに置くかは、意識的なことごととなり、私たちが持つ限界を受け容れる自由 (free acceptance of our limits) ともなった。

象の学である⁴⁷⁾。

“生身の現実 (cruda realtà, reality)” “生身の社会 (living society: city, community and region)” を歩いて行く (巡礼する)。その“旅程”で、異質なものと出会い、自らの内に流れ込み、濁流となって異質なものが織り込まれ、編み合わされていく。

この濁流のなかで、ときに抗い、ときに流れに身をまかせつつ、自らの生身も含めて比較する。ここでの比較 (comparare, compare) とは、他者、異物、“異端／他端／多端 (estranei di punta fine/finis mundi)” として、見ないでいたもの、忌避していたもの、排除していたものを、比較・対話可能なもの、同等なもの (par, pari) として、同一面・同一線上にいっしょに (cum, con) 並べることである (comparare, accoppiare, mettere alla pari, cum (con) e par (pari))。つまりは、“ひとごと (not my cause, misfortune of someone else)” から“わがこと、わたしのこと” (cause, causa, meine Sache) への転換を図ること。見た目の問題 (issue) の背後にある原問題 (latent problem) を切り出し、想定内の「問題解決」ではない“新たな問いを立てる (formulating new questions)” こと、異質を含み混んだ“衝突・混交・混成・重合”のなかで和解しえないものともつきあっていくことである。

その意味で、問いに対する私のアプローチは、現象学的にならざるを得ない。というのも、観察者は自身が叙述しようとするフィールドの外側に立つことはないのだし、ましてやそのフィールドにおける労苦や情熱に巻き込まれることを躊躇すべきではないからである。体験の内容だけでなく、そのプロセスにも注意を向けることから、私の視線は、人間の行為の様々な異なった領域が相互にふれあい、相互浸透しているような場所である境界領域に集中することになるだろう。このフロンティアこそが、私が読者を招き入れ、ともに旅をしたいと思っている場所である。

このような前人未踏の地 (no-man's-land) では常に起こることだが、ある人が発見するのは、未だ明確な形を持って展開されていないだけに、流動的な状態のまま残されている。

47) ここでの記述は、古城利明「再び“境界領域”のフィールドワークから“惑星社会の諸問題”へ」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク—惑星社会の諸問題に回答するために』中央大学出版部、2014年、442-443頁への応答を含意している：

“境界領域”論がこの「物理的な限界」を取り込む「エピステモロジー／メソドロジー」を十分に練り上げていないからではないか、あるいは先送りしているからではないか。だが、すでに触れた「3.11以降」の状況を踏まえれば、この問題をいつまでも先送りするわけにはいかない。さしあたりそれは、新原のいうように、「生存の在り方」を問う」なかで、また「人間の境界線」の揺らぎを問うなかで自覚的に取り上げられるべきであろう。だがその「エピステモロジー／メソドロジー」とは何か。ここに残された課題があるように思う。「惑星社会」から「惑星（地球）」を展望に入れた「エピステモロジー／メソドロジー」、それは宇宙論を前提とした身心論なのか、空無を覗き込んだ現象学なのか、課題は深い。

それゆえ、これから本書で議論をしていくそのプロセスがもたらしてくれる成果については、いまだ構築の途上にある自由に委ねたい。すなわち、私たちすべてが変化に対する責任と応答を、自らに由る形で引き受けるという意味での自由に⁴⁸⁾。

付記：本稿は、社会科学研究所の研究チーム「うごきの比較学」および第 27 回「中央大学学術シンポジウム」の「臨場・臨床の智」チームの調査研究活動に加えて、前川財団家庭教育研究助成金「社会の子どもたち」が巣立つ共創・共成コミュニティに関するイタリアとの共同研究（2018 年度）、中央大学特定課題研究費「“社会文化的な島々” から見た〈基地〉の“比較学”」（2019 年度）、科学研究費・基盤研究 B 海外学術調査「“惑星社会”の問題に応答する“未発の社会運動”に関するイタリアとの比較調査研究」（2019 年度）によって実施した調査研究活動の成果が含まれている。

本稿を執筆中の 2020 年 2 月 26 日、スポーツ・文化イベントの開催自粛要請に続いて、27 日夕刻には、全国すべての小中高校と特別支援学校に対して、3 月 2 日からの臨時休校を要請した。3 月 5 日には、検疫への対応をめぐる、「積極果断」という言葉が首相から発せられ、入国拒否等の措置が決められた。「この 1～2 週間」での「問題の収束」をめざす首相の突然の「果断」は、日常的な“選択的盲目（現実から目をそらす性向）”と表裏一体をなしている。長谷川如是閑が言うように、「『果断』とは外科医の勇気のことだ。一刀両断！但し痛い思いをするのは他人だ」である（長谷川如是閑「如是閑語」『長谷川如是閑選集 第 1 巻』栗田出版会、1969 年、152 頁）。

48) Melucci (1996=2008), 7 頁。イタリア語版では、「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由 (a freedom that urges everyone to take responsibility for change)」についての記述は存在せず、英語版となってから加筆されている。